

日本語時制辞の認知的意味

——メンタルスペースモデルを使って——

山 本 雅 子

要 旨

現代日本語の動詞句末の、いわゆる時制辞と呼ばれる [-ta] [-ru] の振る舞いには際立った二つの特徴がある。一つは、[-ta] [-ru] がコンテキストによって異なった意味機能を発揮すること。もう一つは、コンテキストによっては [-ta] [-ru] の転換が可能である、つまり、言語主体は同一状況を [-ta] によっても [-ru] によっても表現し得るということである。

言語を自律的なものであり、形式と意味の体系からなる記号系としてスタティックに捉える限り、こういった特徴は神秘的な言語現象として保存される以外に手立てがないだろう。しかし、最近の認知言語学の研究事例が説明するように、言葉の発現の背後では事態に対する言語主体の認知作用がはたらいており、言葉は認知作用の一端を映し出したものである。このような認知的観点から [-ta] [-ru] の言語現象を考えれば、[-ta] [-ru] は、まさに、事態認知の舞台裏で働く言語主体の認知作用を形にして見せていることになる。つまり、[-ta] [-ru] は言語主体の内部・外部世界との相互作用を介したダイナミックな身体的な経験の表われとみなされるべきものである。

本稿では、メンタル・スペース、スキーマといった舞台裏の認知モデルを活用し、[-ta] [-ru] の特徴的言語現象が引き起こされる心的メカニズムの解明を試み、解明の過程で開示された意味機能を検証することにより、それらが [-ta] [-ru] の核なる意味機能であると呼ぶにふさわしいものであることを主張する。また、さらに興味深い主張として、解明の過程で明らかになったことであるが、従来一般に本質的な意味機能とみなされることの多かったテンス表示機能が、実は、これまで例外とみなされてきた他の意味機能と同一の意味機能に依拠するものであるということがいえる。

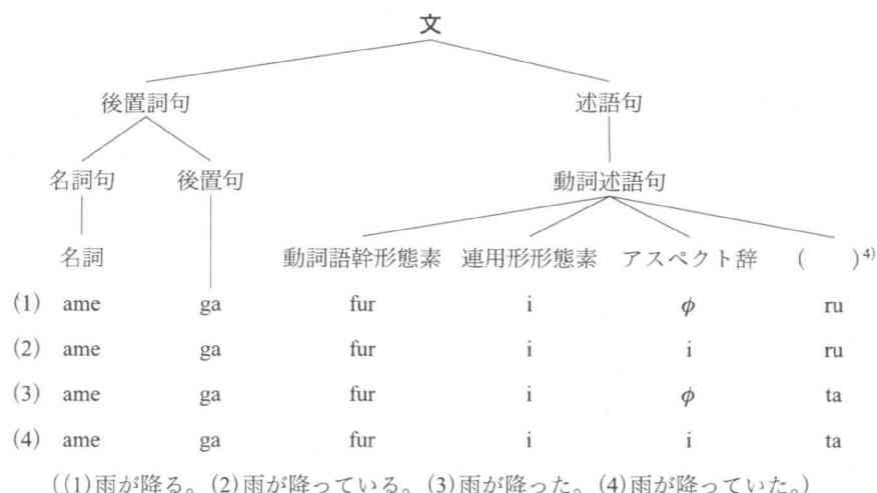
キーワード：メンタル・スペース 予期スキーマ ベース・プロフィール
実現 プレンディング

1. はじめに

現代日本語の動詞の、「過去形」(「タ」)と「現在形」(「ル」)の本質的な意味機能の解明に関しては多くの問題が残されたままとなっている。従来の研究では、テンス説、アスペクト説、モダリティ説という三つの立場から解明が試みられているものが多い¹⁾。たしかに、われわれの日常生活の中での振る舞いを観察すると、「タ」「ル」はそれらが据え置かれる〈環境〉²⁾によって多様な機能を果たしている。そのため、それぞれの立場からの説は、その〈環境〉に限っての独立した説としては納得できるものの、「タ」「ル」の意味機能の本質的把握としては、それだけで十分であり、他の諸説を不要とするものとはとてもいえない。また、しばしば見られる説として、用法が並べ立てられているものがあるが、単なる用法の列挙に満足していたのではいつまでたっても本質的な意味機能の解明に近づくことはできないだろう³⁾。

では、多様な様相をみせる「タ」「ル」の本質的な意味機能を解明するにはどうすればいいのだろうか。それには、様々な意味機能の相関関係を理論的に説明すること、つまり、観察データに合理的で体系立った説明を与えることが必要である。もちろん、この説明は典型的な言語現象のみならず、これまで特殊だと考えられてきた現象をもすべて包括するようなものでなければならない。では、体系立った説明を可能にするためにはどこから着手すればいいのだろうか。それには、従来特殊視されてきた意味機能に目を向けるのが効果的だろう。Fauconnier (1994:xix) が指摘しているように、「実際、特異なケースが操作の一般的性質を明らかにするのに対して、典型的なケースはそうでないことや、いわゆる、「典型的な」ケースが一般的メカニズムの単純な個別例として簡単に説明できることは、これまでなんども確認されている」からである。

特殊視されてきた意味機能を手掛かりにすることにより、「タ」「ル」の意味機能が統一的に説明できれば理想である。そこで、本稿では、さまざまにある特殊なケースのうち、同一状況が「タ」でも「ル」でも表され得るケースを認知言語学のパラダイムで考察する。このパラダイムで、このケースに着目する理由は以下のとおりである。言語をダイナミックに捉える認知言語学のパラダイムでは、「語彙レベル、句レベル、構文レベル等のどのレベルの言語単位も認知主体の概念化の認知プロセスを反映する意味に対応づけられる」(山梨1998)とあるように、あらゆるレベルの言語単位は認知主体の心的操作のあらわれとみなされるものである。したがって、このパラダイムでは「タ」「ル」のような形態素という



(図1)

小さなレベルでも、そこに反映される言語主体の認知プロセスの解明が可能であるはずである。そうであれば、同一状況を表現する文で「タ」「ル」の箇所だけが違いとなって表出するケースを考察対象にすれば、その箇所に反映される認知プロセスの差異が顕かに開示されると考えられる。認知プロセスが解明されれば産出メカニズムが明らかになる。特殊なケースの産出メカニズムが明らかになれば、従来では見えなかった「タ」「ル」の意味機能が見えてくるにちがいない。その意味機能を手掛かりに、さまざまに表出されている意味機能が一貫した立場から説明できれば、それこそが「タ」「ル」の本質的意味機能というものである。以上の観点から、本稿では「タ」「ル」の本質的意味機能の探求を試みる。

2. 形態素 [-ta] [-ru]

「タ」「ル」が統語上は相補関係にあることに着目し、従来の国文法の枠組みから離れ、文が形態素の集まりであり、構造化されたものであるという点を焦点化して「タ」「ル」を統語上(図1)のように位置付けることとする。

(1)から(4)の動詞述語句を構成する形態素について説明すると、[fur-]が動詞の語彙的な意味を表示する語幹部分の形態素、活用辞に位置する[-i-]が連用形を表示する形態素、その後に来る[-φ-]と[-i-]が「ル/タ」と「テイル/テイタ」の違いを表示する形態素、そして、最後が[-ta] [-ru]という形態素である。動詞述語句の構造をこのように捉えることの利点は、「タ」「ル」の対立が形態素[-ta] [-ru]の対立として明らかになるところ

にある。従来の研究では、「タ」「ル」の意味機能について論じるという場合には、[-ta] [-ru] についてではなく、一般にアスペクトと呼ばれる意味機能を表示する形態素である [- ϕ -] と [-i-]⁵⁾をも一緒にしたものを、あたかも [-ta] [-ru] の意味機能であるかのように論じているものが多く見られる。しかし、(図1) が示すように、[- ϕ -/-i-] と [-ta/-ru] は質の異なる形態素の対立である。本稿は形態素 [-ta] [-ru] について論じるものであることを確認しておく。

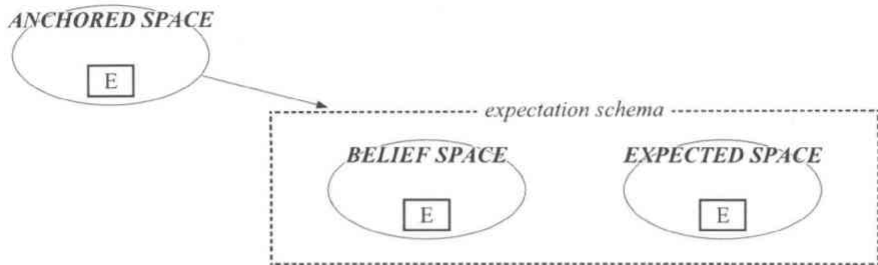
3. 産出メカニズム

ここでは、同一状況が [-ta] でも [-ru] でも言語化される例として、何かを探していて見つけた時の「あっ！ こんなところにあっ[ta]」／「あっ！ こんなところにあ[ru]」という発話を採り上げ、どのような心的操作の違いが [-ta] [-ru] に反映されているかを内観を通して考える。

そこで問題となるのが言語表現と意味との関係の捉え方である。この関係については実に種々な論があるが、Fauconnier (1994, 1997) は、言語表現は意味解釈において直接世界と対応づけられるものではなく、まず、メンタル・スペースを創り出すものとみなし、このメンタル・スペースと現実との関係、及び、メンタル・スペースの中にある要素間に成立する関係などを考察することによって言語表現の意味は明らかになるとしている。「メンタル・スペースでの構築は世界の表現や、世界のモデルや、形而上学世界のモデル（例えば、可能世界）の表現ではない。」「それにもかかわらず、メンタル・スペースの構築は、言語を現実世界に関係づけるのに役に立ち、実際本質的に重要でさえある。なぜかというところ、このような構築は、それ自身は真理条件的ではないが、現実世界の推論や行動パターンを与えるからである。」(1994: 3) ここではこのメンタル・スペースモデルを用いて [-ta] [-ru] の表出メカニズムを考える。

3-1 「こんなところにあっ[ta]」

まず、言語主体は「鍵がない」ことに気づく。この時の言語主体の意識が立脚する SPACE を ANCHORED SPACE (AS) とする。意識上の機軸となる SPACE である。「ない」ことに気づいた言語主体は、気づいた次の瞬間にどこかに「鍵がある」と思う。これは話者の心内でスキーマが生じたことに拠るものである。スキーマとは人がそれまでの経験の中で身につけ、記憶してきた基本的な知識構造のことである。スキーマ⁶⁾は高いレベルから低いレベルへと階層化されており、人には何百万というスキーマが長期記憶に収集されている。日常では、知覚から得られた根拠とそれから生じる期待から最も適当なスキーマが呼び出



(図 2)



(図 3)

され、われわれの考えること、行うことのすべてに影響を与えるのである。

言語主体には、これまでの経験から、目の前に鍵がないことを根拠に、目の前に鍵が無いということ、「目の前ではないどこかに鍵がある」にちがいないという、「どこかにある」こと（「どこかにある」）を予期するスキーマが起動する。これを *expectation schema* (*es*) と呼ぶことにする。スキーマにはいくつかのスロット (*slot*) があり、スロットすべてに値が埋め込まれるとそのスキーマは完了して閉じる仕組みとなっている。

es は EVENT が（予期）というかたちで存在する BELIEF SPACE (BS) と、その（予期）の期待値が埋め込まれる EXPECTED SPACE (ES) という二つのスロットから成る非常に単純な構造物である。*es* が起動し、BS に立脚した話者は「ある」と思われる場所をあちこち探す。その結果、「ある」の期待値として「ある」の（実現）を認知する。これらの認知過程を経て「こんなところにあつ[ta]」の [ta] が発話されるのである。一連の認知過程を経を图示したものが（図 2）である。

3-2 「こんなところにあ[ru]」

一方、探す以上、「ある」の予期意識はあったにちがいないが、実際に探し当ててみると、その場所があまりにも思いがけないところであった場合など、たんにそこに「ある」だけが意識化されることもある。そんな場合には、「ある」の予期意識は消えてしまっており、目の前に物が存在していることだけが意識化され、眼前の状況描写である「ある」の発話となる。

これを言語主体の意識からいえば、一度は *es* が起動し、意識は AS から一旦離れ、BS に移動するが、発話の瞬間には *es* は意識のなかから消えてしまっており、意識は再び AS に

戻って目の前の EVENT を描写しているのである (図 3)。

4. 意味構造

では、産出メカニズムに現れた [-ta] [-ru] の意味構造について考えてみる。モノ・コトを理解する際、その理解の背後で実に多様な認知作用がはたらいっていることは近年の認知科学が実証している⁷⁾ところである。ここではそういった認知的観点から [-ta] [-ru] の意味構造を考える。

4-1 [-ta]

Langacker (1987) は、われわれがことばの意味を理解する際、必ずそのことばを認知領域に照らし合わせて理解することを「弧 (arc)」の概念を用いて説明している (図 4)。

「弧」を理解する場合、われわれは「円」を認知領域とし、その一部に焦点を当てて際立たせることにより、その部分が「弧」であると認知する、というのである。上図では「弧」の部分が太線で表されているが、Langacker は、このように特別な《際立ち》が与えられる部分をプロファイル、その前提となる認知領域をベースと名付け、「弧」の概念だけではなく、拡く、言語の意味構造はベースとプロファイルの相互関係で成り立つとしている。

さて、このようなベースとプロファイルの関係が *es* の構造をも説明する、というのが本稿の主張である。が、一見だけでは、この主張は唐突に聞こえるかもしれない。なぜなら、(図 4) ではベース・プロファイルの関係が全体・部分の関係として見えているのに対し、*es* 構造はどう見ても全体・部分の関係とは見えないからである。しかし、ここで忘れてならないことは、ベース・プロファイルの原義が《際立ち》を与えるものと与えられるものとの関係であることである。(図 4) では採り上げられている例が THING であるため、《際立ち》を与えるものと与えられるものとの関係が全体・部分の関係としての見えを提示しているのである。目で見たり、実体に触れたりできるものを THING と考えるならば、どのような THING であれ、それを認知する場合、認知領域を全体とし、その一部を際立たせて認知していることは、われわれの日常を省みればすぐに思い当たるだろう。こうした THING に対し、一方、*es* 構造が示しているものは EVENT である。両者に大きな違いがあるのは当然である。表面上の見えに惑わされず、《際立ち》を与えるものと与えられるものというベース・プロファイルの本義から EVENT がプロファイルされることの意味を考えると次のようになる。

《際立ち》が成立するためには際立たせる背景となるものがなければならない。つまり、ベース・プロファイルの関係は図と地の認知作用の上になりたっているのである。ベース



(図4) Langacker (1987) : 184



(図5)



(図6)

が地、プロファイルが図である。弧の場合でいえば、認知主体は自身ではたんに図である弧を認知していると思っているが、その認知の背後で地である円を認知しているのである。これと同様のことが *es* 構造でも起きている。「あった」と発話したとき、言語主体は自身ではたんに「ある」の（実現）を認知し、それを言語化していると思っているが、実はその（実現）認知の背後には地である「[どこかに] ある」という、（実現）についてはなんら関与しない EVENT が認知領域となっているのである。

このことから、*es* 構造内の図と地の関係は、（実現）という要因に関与したものであることがいえる。「ある」という EVENT に対してなんら（実現）を意識しなかった話者が（実現）を意識する、言い換えれば、（実現）という要因に関して、無標として捉えていた EVENT を有標として捉えるというこの変化は地から図への認識の変化であり、その変化が（実現）という《際立ち》を生み出しているのである。有標の EVENT を Em, 無標の EVENT を Eu とし、*es* 構造をベース・プロファイルの関係から描きなおすと（図5）となる。これが [-ta] の意味構造である。

（図5）は、表面上は Em だけを言語化したものであるかのように見える [-ta] が、実際は、たんに Em を反映しているのではなく、Eu をベースとし、心的経過を経て Em をプロファイルするというプロファイル化の過程すべてを反映するという動的な認知過程の言語化であることを表している。したがって [-ta] の意味は、たんに（実現）を意味するのではなく、予期した EVENT の（実現）を意味するものであることから、（予期実現）ということになる。

4-2 [-ru]

es 構造のなかに見られる地の役割を受け持っているのが [-ru] である。したがって、[-ru] の意味を考えるには (実現) という《際立ち》を可能にさせる EVENT とは何かを考えればいい。EVENT は (実現) という《際立ち》を帯びると具体的な一個の EVENT となる。となれば、その基盤となる EVENT とは、さまざまな具体的な EVENT を生ぜせしめ得る EVENT でなければならない。地は図にくらべれば消極的な要素であり意識されにくい、図を際立たせるだけでなく、図の意味を限定し、具体化する基盤となる重要な役割を担う。言い換えれば、地である EVENT は一個の EVENT を指し示すのではなく、同一性質を持ついくつもの EVENT の存在とそれらの範疇化を保証する EVENT であり、いわば、「概念」としての EVENT とでもいうべきものである。

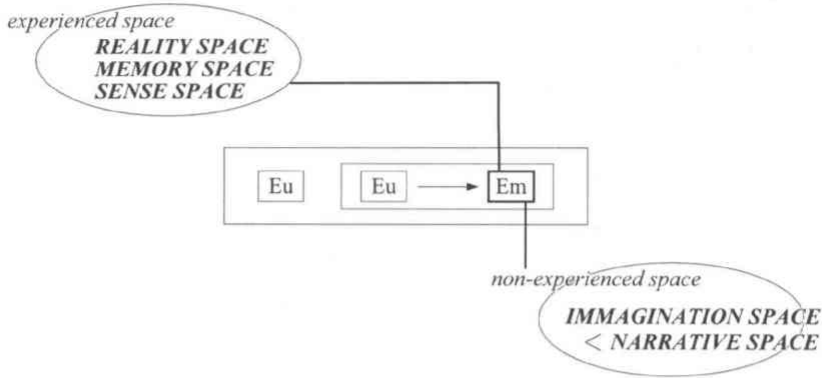
このように、EVENT を「概念」として提示するのが [-ru] の役割である。つまり、動詞句はその動詞自体が含意するさまざまな意味特性を有しているのであるが、[-ru] の意味機能は、そういった意味特性すべてを「そこで括ること」を表示するものである。さらに言えば、言語主体には統括する以上の意味は何もなく、EVENT に向かう意識としては無色透明なものであり、したがって、(実現) という特性に関して言えば、[-ru] の役割は「(実現) に関してはなんら関与しない」ということとなる。

[-ta] が一連の認知過程を反映するという動的な心的操作の反映であるのに対し、[-ru] に反映される心的操作は静的な至極単純なものである。es 構造のなかから取り出した次の図が [-ru] の意味構造である (図 6)。

既述の産出メカニズムのなかでは [-ru] は二種類の振る舞いをしている。一つは、es 内での BS のスロット値である言語主体の考えを表す EVENT を指示し、もう一つは AS に位置する言語主体の知覚 EVENT を指示している。これらの振る舞いは [-ru] の本質の意味がもたらす派生的意味 (次節で説明) である。

5. 意味の派生

言語について考える場合、われわれは、その機能を人と人とのコミュニケーションという身体的行為に集中する傾向があり、言語行為が身体的のみならず、心的行為についても語ることができるものであることを忘れがちである。なるほどわれわれは音声や文字を用いて [-ta] [-ru] を表出している。たしかに発話の現況に目を向ければ、[-ta] [-ru] の発現は身体的行為についてだけのものであるように見えるかもしれない。しかしながら、われわれは、身体として現実世界に立脚しながらも、実に複雑に自己の内部・外部世界と心的交渉しながら日々を生きているのであり、言語はそれらの交渉すべてを反映しているの



(図 7)

である。

ここまでは、従来特殊視されてきた [-ta] の振る舞いのひとつに着目して [-ta] [-ru] の意味構造を考えた。ここでは、この意味構造がたんにこの特殊なケースに対してのみ説明力を持つにとどまらず、実は、一般に理解されている [-ta] [-ru] のさまざまな用法を派生させる核なる意味機能であることを説明する。

5-1 [-ta]

(図 5) に示したように [-ta] は、(実現) という要因に関与し、Eu をベースとし、心的経過を経て Em をプロファイルするというプロファイル化の過程すべてを反映した言語化である。言語資料から判断すると、Em をスロット値とする ES は自己の経験を拠所とする experienced space と経験を拠所としない non-experienced space という二種類のパラメーターが存在し、さらに前者には REALITY, MEMORY, SENSE, 後者には NARRATIVE, IMAGINATION の五つの SPACE がパラメーターとして存在する (図 7)。

5-1-1 SPACE と意味

言語主体は、[-ta] の発現の背後でこれらの SPACE の一つにコミットするのであるが、コミットされた SPACE の特性と Em との相互作用がさまざまな派生的意味を生じさせる。従来、いわゆる用法として列挙されている意味 (『』で示す) はこの派生的意味である。ここでは [-ta] の持つ (予期実現) という核なる意味が Em と SPACE の交渉により様々な意味を派生する実例を示す。

なお、Eu と Em の関係には以下の 3 種類がある (【】の数字は後で示す実例の番号を表す)。

- (1) Eu の EVENT がそのまま Em の EVENT として実現する 【1】。

(2) Eu は「何かが起こる」という内容不明瞭なものである。しかし不明瞭ではあるが「起こる」に関しては言語主体は確信を持っており、その不明瞭な内容が EVENT の形で Em として（実現）する【3】。

(3) Em が Eu を含意する【6】。このケースは（変化）を表す表現が多い。（変化）とは〈ある状態〉から〈他の状態〉への推移である。認知主体の意識からすれば（変化）を意識するのは推移した〈他の状態〉を認知したときであるが、その際、認知主体は〈他の状態〉へと推移する前の〈ある状態〉をも意識内で認知しているのである。〈ある状態〉から〈他の状態〉への推移を es 構造内に引き込んでいえば、〈ある状態〉が Em、〈他の状態〉が Eu に当たり、Em が Eu を含意するということになる。もっとも、このようにいえば、本来、ベース・プロファイルの関係が〈ある状態〉から〈他の状態〉への推移のうえに成立するものであるため、（変化）のみならずあらゆる意味においてこの Em が Eu を含意することは成り立つのであるが、（変化）においてその特性が顕著に表出するということである。

また、Em の表現化には、EVENT をそのまま EVENT として表現する場合と、EVENT に対するコメントとして表現する場合との二種類がある。紙幅の都合上コメントの実例は REALITY SPACE の場合だけ挙げるが、コメントはどの SPACE にも現れ得る表現化である。

(1) REALITY SPACE : Em を目の前のものとして認知する SPACE (『発見』『レポート』)

【1】『発見』(EVENT)

ギシ、ギシと足音が階段を降りてくる。

壮太郎「来た………」

里子「怖い！」

(「新居酒屋ゆうれい」：249)

あたりの気配を根拠に、[幽霊がでる]を BS 値とする es が起動した壮太郎は、ギシ、ギシという足音を聞いて[幽霊が来る]の（実現）を目の前の EVENT として『発見』する。『発見』の EVENT が「来[-ta]」と言語化されている。

【2】『発見』(コメント)

舞の予想どおり音楽も聞こえない程緊張していた杉山を導くように豊子がうまくリードした。

舞「フォールアウェイ・リバース、テレスボン！ スローアウェイ・オーバスウェイ」

そこまで見事に決めた杉山と豊子。

舞「やった！」

(「Shall we」：38)

極度に緊張している杉山を見て、舞の心内には「なにか良くないことが起こる」を BS 値とする es が起動する。Em の期待値としては、[突然音楽に乗れなくなる][足がもつれて転んでしまう][ステップを間違える]などなど、何が該当するか分からない。しかし、何かが起きることは確かである。そんな舞が ES 値として認知したのは「見事にきめる」という EVENT の眼

前での（実現）である。EVENT に対するコメントが「やっ[-ta]！」と言語化される。

【3】『レポート』

犯人を見張っている落合と前田。二人の目の前を猛スピードで走り去ってゆく沢木。無線機を手に叫ぶ前田。

前田「郵便屋が動きました！」

（「ポスト」：326）

犯人を見張っている前田刑事の心内には、[郵便屋（沢木）がなんらかの行動を起こす]をBS値とするesがずっと存在している。そんな前田が「猛スピードで走り去ってゆく沢木」を眼にしたES値が[動く]の（実現）として認知される。刑事である前田の職務は本部への報告である。認知と同時に職務である『レポート』のための言語化が「やっ[-ta]」となる。『レポート』と『発見』はEmをEVENTとして表現する点では同じであるが、発話の対象が、『レポート』は他者に、『発見』は自己に向かうという点で異なる。

(2) MEMORY SPACE：Em をかつての経験または認識として認知する SPACE （『回想』『想起』）

【4】『回想』

舞の声「私が初めてブラックプールに行ったのは5歳の時だった。町の中心にあるタワーのボールルームはとても大きくて立派で、私は知らない火とに混じって、一生懸命ステップを真似しながら踊ったわ。ブラックプールは父と死んだ母の憧れだった。」

（「Shall we」：89）

自分がダンスをするようになった背景を語ろうとする舞の心内では、[語るべきことがいくつもある]をBS値とするesが起動し、かつての経験が次々とES値として表出され、それらの『回想』EVENTが[-ta]で言語化される。『過去』との違いは後述する。

【5】『想起』

古畑「若旦那が、ええ、若旦那が、父親の目を盗んで遊郭に遊びに行く、友達の善さんに声色を使って自分のふりをさせ、アリバイを作る、なんかこんな話でしたね」

（「古畑任三郎」）

かつて聞いた落語の筋を話そうとする古畑の心内には、[一連の筋を持った話しである]をBS値とするesが起動する。記憶を辿り、順にその出来事を列挙し、[一連の筋を持った話しである]ことの（実現）がMEMORY SPACEのESスロット値となり、『想起』EVENTとして[-ta]で言語化される。

(3) SENSE SPACE：Em を変化の結果として感覚的に認知する SPACE （『変化』）

【6】『変化』

ゆみ子「（その手の向こうにひろがる光りに目を奪われ）エエ陽気になりましたね」

喜大「エエ陽気になったなあ……」

（「幻の光」：135）

[エエ陽気である]の（実現）を認知する二人の意識のなかではその時までの[エエ陽気でない]状態が基点となって存在してる。[エエ陽気でない]から[エエ陽気である]への『変化』、つまり、[エエ陽気でない]を含意した[エエ陽気である]が[-ta]となって言語化される。

【7】『変化』(身体感覚)

辰夫、入ってきて、
辰夫「ビールくれ。喉乾いちゃった」

(「居酒屋」：241)

身体感覚の『変化』の場合も Eu を含意して Em が成立しているのであるが、【6】とは異なり、言語主体の意識には Eu は全くのぼらない。これは次の理由によるものだろう。日常最もわれわれの意識にのぼらないことは自己の存在だろう。これと同程度に、われわれは自己の正常時の身体状況に関しても意識をしないのが常である。咽が乾く、お腹が空く、疲れる等々の身体状況の変化が起きると、そこではじめて、その状態が正常時の状態から非正常時の状態への変化であることを意識するのである。[喉が乾かない] から [喉が乾く] への『変化』、つまり、[喉が乾かない] を含意した [喉が乾く] が [-ta] となって言語化される。

(4) IMAGINATION SPACE : EVENT の(実現)を仮想世界のものとして認知する SPACE

(『想定』『命令』)

【8】『想定』

先生「たかが、逆上がりと思うかもしれないが、これは困難にぶつかった時、それを乗り越えるという人生の勉強です。」

(「夏時間」：37)

何故今逆上がりができるようにならなければいけないかを話すために、先生は子供たちの将来という IMAGINATION SPACE を設定する。[大人になるといろいろなことが起こる] を BS 値とする es のなかで、先生は [困難にぶつかる] の(実現)を Em の期待値として与える。将来という非現実世界での Em 値は『想定』⁸⁾の意味を持つ。このような『想定』は、いわゆる仮定、条件を意味する節のなかに現れることが多い。

【9】『命令』

「さあ、買った！ 買った！」

(作例)

一見特異な振る舞いのように見える『命令』も、IMAGINATION SPACE での(実現) EVENT である。売り手である言語主体の心内では、商品を買わせたいという願望から、[買う] を BS とする es が起動しており、客が現れると、本来であればその客の [買う] の(実現)を認知した際に与えられる ES 値を、(実現)を認知してもいないのに認知したものとして発話し、相手にも(実現)認知を要求する。

命令の表現としては他に「買え、買え」「買って、買って」「買う、買う」などあるが、これらはいずれも [買う] の(実現)についてはなにも述べておらず、実際に(実現)させるか否かは聞き手の判断に委ねられている。しかし、「買った、買った」では聞き手の意向を無視して(実現)を認知することを『命令』するものであり、話者本位の印象が非常に強い。このような態度はコミュニケーション上望まれず、日常での表出頻度は極めて少なく、実際の会話の場では相手との関係を配慮して依頼などの表現に変わる場合が多い。

(5) NARRATIVE SPACE : IMAGINATION SPACE での(実現) EVENT の集合により創り上げられた架空 SPACE

(『事実』)

この SPACE での一個一個の [-ta] は IMAGINATION SPACE の [-ta] の特質を持つもので

あり、それらが結束性を持ち、集合したものである。しかし、いくつかの実例を挙げて説明するのは紙幅の都合上難しいため、ここでは近・現代小説における [-ta] [-ru] の振る舞いを挙げる。

- ・ [-ta] の振る舞い
 1. 時の流れの形成（流れの方向性と広がり）
 2. 事象間の他動性関与度の強さを明示
- ・ [-ru] の振る舞い（「タ」と結束）
 1. 解説（背景状況，焦点語句，知識挿入，因果関係）
 2. 作中人物の視点での知覚内容
 3. 作中人物の視点での思考内容
 4. 語り手・作中人物の視点での判断，評価，推量

山本（1996：14）

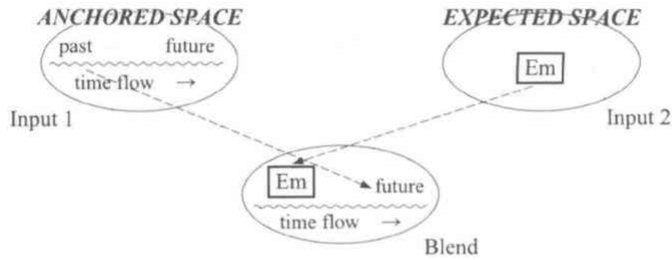
小説世界が、EVENT が因果関係および時間的順序に並べられて創り出された一つの架空世界であることは多くの文学批評家⁹⁾が指摘するところである。上述の [-ta] [-ru] の振る舞いからは、EVENT を因果関係および時間的順序に配置し、小説世界の『事実』であるとコード化する役割を [-ta] が担っていることを示す。詳細は山本（1996.1999）を参照。

5-1-2 テンス（「過去」）

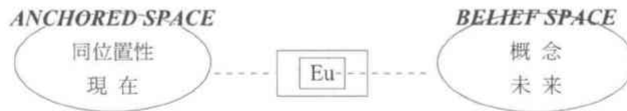
『過去』も派生的意味の一つであるが、従来では [-ta] の意味といえば『過去』を主たる意味とみなし、それ以外の意味を特殊視する傾向が強い。しかし、実際はこれまで説明してきたように、『過去』以外の用例がすべてその意味を Em と SPACE の特質という二つの要素の相互作用で説明できるのに対し、『過去』だけが同様に説明できないという興味深い現象となっている。これは『過去』がテンスであるため、『過去』を説明するためにはなんらかの形で時間要素を加えなければならないことに拠るものである。時間は日常においてあまりにも重要であるため、われわれは時間が意識に本来的に備わっている要素であると錯覚してしまっている。しかし、時間も、実際のところ、他の要素と同じく意識に外から加えられた要素の一つにすぎず¹⁰⁾、われわれは意識下でこの要素を取り付けたり外したりしながら日常を過ごしているのである。

では、言語主体が『過去』を認識する際にはどのような認知行為を行っているのだろうか。これを説明するためには BLENDING という心的操作を導入する必要がある。BLENDING とは、二つのメンタル・スペースからその一部分を取りだし、それらを融合することによって三つめのメンタル・スペースを産出する心的操作をいう¹¹⁾。

（図8）は言語主体が『過去』を認識する際の BLENDING 操作を図示したものである。まず、言語主体は MEMORY SPACE での Em を認識する。この認知行為は『回想』と一致するが、『過去』の場合はここでとどまらず次の心的操作へと連続していく。MEMORY SPACE で Em を認識した言語主体は MEMORY SPACE を Input SPACE 1 とし、そこから Em



(図 8)



(図 9)

を取り出す。と同時に自身の立脚する AS を意識化し、そこで時間要素を付加してイマという時を機軸とする時の流れを設定する。この AS を Input SPACE 2 とし、そこから時の流れを取り出す。取り出した時の流れと Em とを Blend SPACE で融合する。すなわち、(実現) という特性を付加された EVENT を自身の今を機軸とした時の流れの中に据え置くのである。時の流れの中で EVENT の(実現)を認知するとなれば、その EVENT は必然的に『過去』となる。これが『過去』の意味が認知されるメカニズムである。

つまり、『過去』も『回想』も ES のパラメーターは MEMORY SPACE が選ばれており、この点においては一致しているが、『回想』の Em が MEMORY SPACE を閉じた SPACE としてそのなかで完結する一方、『過去』の Em は MEMORY SPACE と AS との連続線上に位置しているのである。したがって、『過去』と『回想』の違いは言語主体の意識の違いであり、外側から識別することは難しいことが多い。

【10】『過去』と『回想』

刑事「その手紙、読んでからどこへやった？」

拓郎「読んですぐ捨てました。」

(「うなぎ」: 134)

拓郎を犯人とする証拠となる過去の事実を収集しようとする刑事にとっては、自身の発話も拓郎の発話もすべて『過去』の EVENT に言及したものである。一方、拓郎も、我が身の潔白を証明しようとしているのであれば、発話は『過去』の事実の説明であることになるが、この場面では、何故妻を殺すなどという罪を犯したのか自分でも分からない拓郎は、自身の潔白を証明しようという気など全くなく、自分の犯した行為を他人事のようにぼんやりと思い出している様子である。そんな拓郎にとって「手紙を捨てる」という行為は MEMORY SPACE のなかに閉じられた Em であり、彼のにとっては『回想』EVENT とみなした方がいいだろう。

5-2 [-ru]

[-ta] と大きく異なり, [-ru] の派生的意味について述べようとする, 統語上 [-ru] の前に位置する [-φ-] [-i-] の形態素との絡みを無視することが出来ない。いわゆるアスペクトとの関係であるが, 本稿ではそれについて論じる余裕はないので別稿に譲ることにし, ここでは, [-φ-] [-i-] の形態素の違いが EVENT を以下のように大きくふたつの SPACE に棲み分けさせている実際だけを示しておく。(図9)

5-2-1 SPACE と意味

(1) ANCHORED SPACE: 言語主体が EVENT を自身と同位置にあると意識する SPACE

(『同時性』¹²⁾)

ここでの [-ru] は [-i-] と共存する。先に述べたように, [-ru] の意味機能は動詞句を無色透明のものとして括るという, とりたてて特性を顕示しないものであるために, ここでは [-i-] の機能である『同時性』がおおきくはたらく。この『同時性』がコンテキストに応じて, EVENT を言語主体が見たとする視覚 EVENT としたり, 副詞をつけて繰り返しの行為としたりする。

(2) BELIEF SPACE: 言語主体が EVENT を「概念」として捉える SPACE

(『コトガラ』『真理』『習慣』)

ここでの [-ru] は [-φ-] と共存する。EVENT を「概念」として提示するという [-ru] の本来的役割をまさに果たしているのがこの SPACE であるが, 「概念」としての EVENT はコンテキストに応じて次のように多彩な意味を表す。「概念」が日常性を帯びれば『コトガラ』となる。その『コトガラ』が日常の繰り返しの行為とみなされると『習慣』となる。また, 『コトガラ』も内容次第で誰にも動かしがたい『真理』となる。

次の例文は①が ANCHORED SPACE, ②③が BELIEF SPACE の EVENT である。

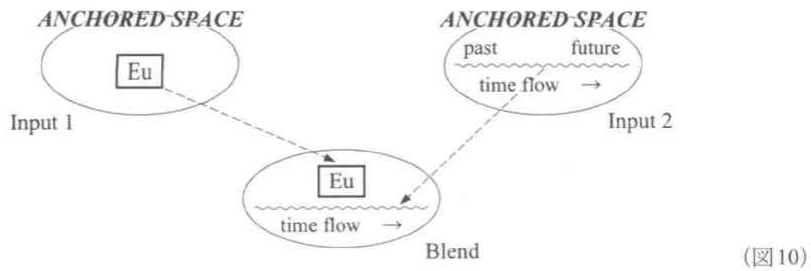
- 【11】三輪「だから素人はやんなっちゃうんだよな。これだけのカップルが①踊ってるんだから、接触しないほうが難しい。大体、こっちでよけても、むこうでぶつかってくること②ある。大事なのはぶつかった後。ぶつかれば自然と審査員の③目を引く。」

(「Shall we」: 38)

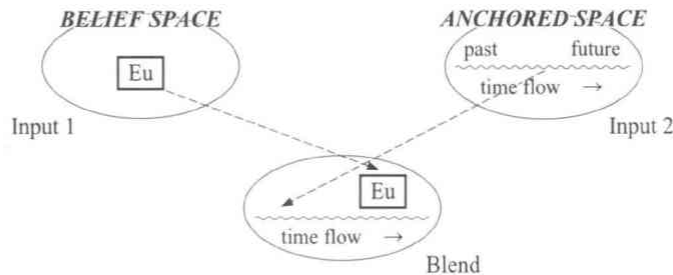
5-2-2 テンス (「現在」「未来」)

[-ru] は SPACE を異にして AS では『現在』, BS では『未来』という二種類のテンスを示す。この違いは形態素 [-i-] [-φ-] が引き起こすものである。『現在』『未来』が表出するメカニズムは『過去』の場合と同じように BLENDING 操作によるものである。

『現在』の場合は Input SPACE は1も2も AS である。Input 1として Eu, Input 2として時の流れが取り出され, この二つが Blend されて『現在』という特性が EVENT に付加され



(図10)



(図11)

る (図10)。

『未来』の場合は BELIEF SPACE が Input 1, ANCHORED SPACE が Input 2 となり, BS から Eu, AS から時の流れが取り出され, この二つが Blend されて『未来』という特性が EVENT に付加される (図11)。

5-3 転換可能性

[-ta] [-ru] の特筆すべき振る舞いである〈転換可能〉な現象, つまり, 同一状況が [-ta] でも [-ru] でも言語化し得る点に着目して本稿は論を進めてきた。これまで述べてきたことから明らかなように, [-ta] [-ru] の発現は EVENT が据え置かれる SPACE の違いの反映であり, [-ta] [-ru] は選ばれた SPACE での EVENT であることをコード化するものでもある。SPACE はどの SPACE も特有の性質を備えており, 言語主体の心的態度を反映したものである。したがって, [-ta] [-ru] が転換可能であるということは, 同一の状況が複数の SPACE で認知され得るということである。[-ta] [-ru] が対立して現れ出る可能性としては, ES vs AS と ES vs BS の二種類あるが, 転換はどの SPACE 間でも可能であるというわけではない。

- | | |
|--|--|
| ① (ES) のどが乾いたの？
(AS) のどが乾いているの？ | ② (ES) 帽子をかぶった人
(AS) 帽子をかぶっている人 |
| ③ (ES) あの人が田中さんでしたね。
(AS) あの人が田中さん <u>です</u> ね。 | ④ (ES) もうこの本は <u>読</u> んだよ。
(AS) もうこの本は <u>読</u> んでいる ¹³⁾ よ。 |

⑤¹⁴⁾ (ES) もしも私があなただったとすると、……

(AS) もしも私があなただとすると、……

①②③は ES vs AS の対立であり、EVENT を（予期実現）とみなすか、EVENT の目の前で生起とみなすかの対立である。このような ES vs AS 間に限って転換が可能になり得る¹⁵⁾。同一の状況が [-ta] でも [-ru] でも表されるこの現象は奇異な印象を与えるが、そのからくりは EVENT に対する言語主体の心的態度の違いにあるのである。このような二種類の SPACE 間の転換が巧みに駆使されているのが小説の文章である。小説の文章では [-ta] が前景文、[-ru] が背景文を表示する¹⁶⁾。意識する、しないは別として¹⁷⁾この機能を熟知した語り手は、実に巧みに [-ta] [-ru] を使い分け、レトリカルに小説世界を描き出しているのである。

一方、ES vs BS 間では転換させると意味が異なる。

⑦ (ES) 今度スペインへ行った時に会うつもりです。⑧ (ES) 検討したうえでお答えします。

(BS) 今度スペインへ行く時に会うつもりです。 (BS) 検討するうえで参考にします。

⑨ (ES) もしも彼が食べたとすると……

(BS) もしも彼が食べるとすると……

また、EVENT が成立するために（実現）の《際立ち》が必須条件になる場合には [-ta] での言語化しか許されず (⑥)、（実現）の《際立ち》がないことが必須条件になる場合には [-ru] での言語化しか許されない (⑦⑧)。

⑥ (○) 食事をした後、映画に行きましょう。⑦ (×) 食事をした前に映画に行きましょう。

(×) 食事をする後、映画に行きましょう。 (○) 食事をする前に映画に行きましょう。

⑧ (×) 右に曲がったと信号があります。

(○) 右に曲がると信号があります。

6. おわりに

言葉を形式と意味の対応からなる自律的な記号系の一種として捉える限り、様々な意味用法を認めざるを得なかった [-ta] [-ru] の意味機能を、話者の内部・外部世界との相互作用を介してのダイナミックな身体的経験として見直し、メンタルスペースモデルを用いることにより一貫した立場からの説明を試みた。

[-ta] は、たんに EVENT の（実現）認知の反映ではなく、es スキーマにおいて、（実現）にはなんら関与しない、概念とでもいうべき EVENT をベースとし、心的経過を経て EVENT

の（実現）性をプロファイルするというプロファイル化の過程すべてを反映した言語化である。一つの形態素が、とりわけ [-ta] のような形態的に小さな形態素がこのような複雑な認知過程を反映するというこの結論は奇異な印象を与えるかもしれない。しかし、言葉が意味を伝えるのではなく、意味への指針を示すに過ぎないことは他の多くの言語事例がすでに物語っているところであり、[-ta] でもそれが実証されたこととなる。それに対し、[-ru] は動詞句を、言語主体としてはなんらかの態度で色づけることなく無色透明なものとしてそこで括ることを表示する、という非常に単純素朴なものである¹⁸⁾。

さらに、このような [-ta] [-ru] の持つ本質的意味機能が言語主体の心内に存在する種々のメンタル・スペースと交渉すると、テキスト、ディスコース上で、従来用法としていわれていきたような様々な意味を派生することも述べてきたが、ここで非常に興味深いのは様々な派生的意味とテンスとの関係である。従来では [-ta] [-ru] といえば、その名称が物語るように、テンス機能こそがその主たるものであるという考えが通説であった。しかし、本稿の考察ではテンスも派生的意味の一つにすぎないということ、さらに、テンスだけが他の派生的意味にさらにもう一過程の心的操作を加えなければ産出されないことが明らかとなった。これは、「『典型的な』ケースが一般的メカニズムの単純な個別例として簡単に説明できる」という冒頭で引用した Fauconnier (1994) の説を補強するものである。

言葉の発現の背後には言語主体の事態に対する認知作用がはたらいており、言葉が認知作用の一端を表し出したものであることは、最近の認知言語学の多くの研究事例が証明しているところである。認知言語学の分野ではそういった説明のためにいくつかのモデルが提案されており、本稿で採用したベース・プロファイル、スキーマ、メンタル・スペースもその一部である。一見ではこういったモデルはたんに目の前の言語現象を説明するための思いつきであるかのように見えるかもしれない。しかし、決してそうではない。提案されているモデルの多くは言語以外の分野ですでにその科学的効力を発揮している。さまざまな分野を貫いて効力を発揮するモデルを創り出すことは人間の知のメカニズムを探索するための不可欠な営みであり、まさにわれわれは今その過程にあるといえよう。

本稿で採り上げた問題の出発点は、一般に時制を表すとされながら、その名称と機能が一致しないところにあったのだが、時制に関して名称と機能が一致しないのは、他の多くの言語にも見られるところである。そういった他言語の時制メカニズムも本稿と同一のモデルで説明できれば、本稿での主張に普遍性がもたらされることになる。目下取り組んでいるところである。

注

- 1) 寺村 (1984) 参照。
- 2) 日常で言語が意味をもつとき、それは必ず構造のなかにおいてである。意味を持った構造の最小単位が文である。文はかならず CONTEXT のなかで成立している。ここでいう〈環境〉とはあらゆるジャンルの CONTEXT を指す。
- 3) 山田 (1908: 4) でも「古來の學者は分析に密にして綜合に粗きなりき。(略) 然れども一步外に出でて國文法全般の状況を達観すれば、支離滅裂戦国時代群雄割拠の状あり。」と指摘されている。
- 4) この箇所には時制辞という名称が付されることが多いが、それは本稿が主張しようとするところとは異なるため、この段階では名称を付さずに置く。
- 5) [-φ] が perfective, [-i] が imperfective を表示する。
- 6) Bartlett (1932) Minsky (1975) 参照。
- 7) Fauconnier (1999) では、こういった認知作用を backstage cognition と呼び、viewpoints, figure-ground, profile-base, framing, idealized models, mental spaces, conceptual blending など多数を挙げている。
- 8) 『想起』のうち、例のように「でしたね」と表現されるものはしばしば「確認」という用法的意味が与えられるが、「確認」の意味機能は「でしたね」の「ね」に依拠するものであり、[ta] の意味機能ではない。
- 9) E. ミュア (1954), E. M. フォスター (1969), P. ラボック (1957) 参照。
- 10) 聖アウグスティヌスの以下の文章は時間についてのあまりにも有名な言であるが、実に的確に時間に対するわれわれの意識を言い当てている。

それでは、時間とはなんであるか。だれも私に問わなければ、私は知っている。しかし、だれか問うものに説明しようとする、私は知らないのである。(略) しかし、それではかの二つの時間、すなわち過去と未来とは、過去はもはや存在せず、未来はまだ存在しないのであるから、どのようにして存在するのであるか。また、現在もつねに現在であって、過去に移りゆかないなら、もはや時間ではなくして永遠であるだろう。それゆえ、現在はただ過去に移りゆくことによってのみ時間であるなら、私たちはどうしてその存在する原因がその存在しないことにあるものを存在するといえることができるであろうか。すなわち時間はただそれが存在しなくなるというゆえにのみ存在するといつて間違いないのではなからうか。(p. 114) (下線筆者)
- 11) このようなさまざまな SPACE の出現理由を Fauconnier (1996) は次のように説明している：「言語は、われわれの使い方では、認知構築の氷山の一角に過ぎない。談話の展開にともない、多くのことが舞台裏で進行している。新たな領域が現れ、結合が作られ、抽象的マッピングが働き、領域内の構造が現れたり広がったり、視点や焦点は移動しつづける。日常的な話や談話は、目に見えない、高度に抽象的な普遍構築物に支えられている。」
- 12) [-i] の意味機能にはその前に生じた EVENT との「同時」を示す機能がある。山本 (1996) 参照
- 13) 経験を表す「ている」は従来では全く異質なものとして扱われているが、生起する SPACE という観点から捉えれば「今…ている」の「ている」と同様 AS の EVENT である。これには詳説が必要であり、別稿を執筆中である。
- 14) どちらも「もしも」で修飾される仮想世界の EVENT であるが、(AS) は「私」と「あなた」

との視点交換が反映する仮想世界 (Fauconnier (1996) 参照), (ES) は「私があなただ」の(実現) EVENTである「あなただ」[ta]が反映する仮想世界, という違いがある。

15) ES vs AS がすべて転換可能というわけではない。

16) 山本 (1996) 参照。

17) 谷崎 (1934) 川端 (1954) 三島 (1959) 丸谷 (1977) 井上 (1987) ではそれぞれ, 作家である彼らの「タ」「ル」に関する意識が書かれている。

18) 従来の国文法では [-ta] [-ru] は統語上相補関係として表れるにもかかわらず, [-ta] は助動詞, [-ru] は動詞の活用の一部というように, 齟齬をきたした関係として捉えられており, 何故こうした齟齬をきたした関係として捉えるべきかの説明は明確にされていないように思われる。しかし, 本稿で提示した, [-ru] をベースにして初めて成立する [-ta] の意味構造は, [-ta] と [-ru] が表層上相補関係として表れながらも, 本来的に異質なレベルとして存在している形態であることを明らかに示している。

(注) ここで確認しておきたいことは, ES vs AS の対立に限って同一状況が [-ta] でも [-ru] でも表され得るのだが, これは ES vs AS での [-ta] [-ru] の対立がすべて同一状況を表すわけではない。

例文出典

- 荻田芳久 1996 「幻の光」『シナリオ'96 1月号』シナリオ作家協会
 サブ 1997 「ポストマン・ブルース」『'97年鑑代表シナリオ集』映人社
 周防正行 1996 「Shall we ダンス？」『'96年鑑代表シナリオ集』映人社
 田中陽造 1996 「新居酒屋うれい」『'96年鑑代表シナリオ集』映人社
 富川元文 1997 「うなぎ」『'97年鑑代表シナリオ集』映人社
 中島哲也 1996 「夏時間の大人たち」『'96年鑑代表シナリオ集』
 布施博一 1996 「お日柄もよろしくご愁傷さま」『'96年鑑代表シナリオ集』映人社
 三谷幸喜 1999.3.13 放映 「干物箱・古畑任三郎」フジテレビ

参考文献

- 聖アウグスティヌス 服部英次郎訳 1997 『告白』岩波文庫
 Bartlett, F.C. 1932 *Remembering*. Cambridge: Cambridge University Press
 Fauconnier, Gilles. 1994 *Mental Spaces*. New York: Cambridge University Press. [Originally published (1985) Cambridge: MIT Press.]
 — 1997 *Mappings in Thought and Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
 — 1999 Meaning, Language, Cognition http://cogweb.english.ucsb.edu/Abstracts/Fauconnier_99.html
 Foster, E.M. 1927 *Aspects of the Novel*. Edward Arnold & Co. (米田一彦訳 1996 『小説とは何か』ダヴィッド社)
 井上ひさし 1987 『自家製・文章読本』新潮社
 川端康成 1954 『新文章読本』新潮社
 Langacker, Ronald W. 1987 *Foundations of Cognitive Grammar I*. Stanford University Press
 Lubbock, P. 1921 *The Craft of Fiction*. London: Cape (佐伯彰一訳 1957 『小説の技術』ダヴィッ

- ド社)
- 丸谷才一 1977 『文章読本』中央公論社
- Minsky, M. 1975 A framework for representating knowledge. In: P.H. Winston (eds.) *The Psychology of Computer Vision*. New York: McGraw-Hill, pp. 211-277.
- 三島由紀夫 1959 『文章読本』中央公論社
- Muir Edwin. 1928 *The Structure of the Novel*. The Hogarth Press (佐伯彰一訳 1954 『小説の構造』ダヴィット社)
- 谷崎潤一郎 1934 『文章読本』中央公論社
- 寺村秀雄 1982 「タ」の意味と機能『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 山田孝雄 1908 『日本文法論』宝文館出版
- 山梨正明 1998 「認知言語学の研究プログラム」『言語』第27巻 第11号
- 山本雅子 1996 「テンスとモダリティのあいだ」『言語科学論集(2)』京都大学情報科学講座
- 1997 「こんなところにあった」『言語科学論集(2)』京都大学情報科学講座
- 1998 「パースペクティブを反映する言語表現」『表現研究67』表現学会
- 1999 「タ」：実現を表示するアスペクト」『日本言語学会第118回予稿集』